

【論文提出者】 社会文化科学研究科 公共社会政策学専攻 公共社会形成論講座
社会規範論分野
清水 俊

【論文題目】 ハンス・ヨナスの倫理学

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ハンス・ヨナス（Hans Jonas、1903-1993）の「責任倫理」に関して、彼の著作を横断的に分析することを通して、その全体像を明らかにすることを目的としたものである。「環境倫理学」への関心が高まるにつれ、『責任という原理(Das Prinzip Verantwortung)』（1979）を通して、ヨナスの名前や著作はよく知られるようになった。しかし他方で、ヨナスの仕事全体を取り扱った研究は、未だ多いとは言えない。本稿において清水氏は、ヨナス倫理学全体を統一的に解釈し、その妥当性を吟味することで、この分野に新しい流れを生み出そうとしている。

本論文は、以下のような流れで論じられる。まず第一章では、科学技術文明下における新しい倫理の必要性と、その特徴である未来世代への倫理について、ヨナスの議論に即して論じられる。さらに、ヨナス倫理学の基礎となる「存在論」と「有機体の目的」について予備的に検討される。続く第二章では、有機体における「多様性」概念についての詳細な分析がなされている。さらに、ヨナスによる神学研究の分析を通して、それらがヨナスの存在論、ひいては責任倫理に対して、暗黙裏に基底的影響を与えている可能性を強く示唆している。第三章では、責任倫理の核となる「責任」概念の分析が行なわれる。ここでは、従来の倫理学における責任概念と、責任倫理における責任概念がどのように異なるのかが論じられている。そして、責任倫理における責任概念は、人間的な相互性ではなく、存在の存続性という観点から基礎づけられることになる。ヨナスは、存在一般の中からとりわけ人間存在の存続性が重視される理由について、その存在論的優位性と主観性とをあげている。しかし清水氏は、ヨナスの『主観性の復権』を批判的に考察することで、そのどちらも、責任倫理の基礎づけとしては不十分であると結論する。氏はそれに代えて、ヨナスによる「種のエゴイズム」という概念をより積極的・文脈的に再解釈することで、それを、存在の目的としての多様性概念を乗り越える鍵概念とする。最後の第四章では、環境倫理学における従来のヨナス解釈の問題点を指摘しながら、そこで責任倫理がどのような役割を果たしうるかを論じる。さらに氏は、それらが新しい倫理学として、現代社会の諸問題にどのように活かされていくべきかを論じている。

本論文における清水氏のスタンスは、基本的にはヨナスの議論の内在的な整合性を重視するものであり、堅実である。しかしそれは決して、ヨナスをただ礼賛するようなものではない。ヨナスの議論のうち、不十分で不整合な部分を批判的にあぶり出す際の氏のヨナス批判は、時に容赦のないものである。ヨナス研究においては、未だ氏のような全体的なアプローチ自体が一般的ではないことを鑑みると、そこにも本研究の意義はある。また本論文には、ヨナスと対峙しながら自分の思考を練り上げた跡が十分に見て取れる。ヨナスの哲学・倫理学そのものの複雑さに由来する問題と、議論の荒削りさが完全には払拭されたとまでは言えないが、先行研究のリサーチ、主要テキストの読解、論点や論旨の明確さという観点から、この分野の博士論文としての要件を十分に満たしていると判断される。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成 23 年 1 月 11 日(10:20-11:50)、文学部小会議室において、口述試験を実施した。

また上記の者は、同年 1 月 23 日 (14:00-15:00)、文法棟 A3 教室において、学位論文に関する公開発表を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域について、すぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するに値すると判定した。

【審査委員会】

主査	田中	朋弘
委員	高橋	隆雄
委員	中川	輝彦
委員	岡部	勉
委員	伊藤	洋典